Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

I 35

幼児の絵画発達の見直し－頭胴足人の表現－

岡　田　憨　吾
（山口芸術短期大学幼児教育科）

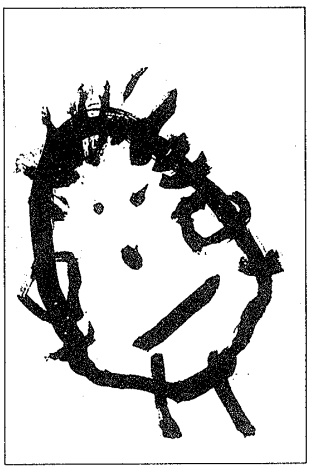
はじめに

ある展覧会で年少児の「お母さん」の絵を審査していた時のことである。保育所の年少児は5月頃になると大半は人物（頭足人）も描けるようになるので、こうした作品が展覧会にも出品されることがある。

その中に、クラス全員の作品が顔を線描きして肌色で彩色した「頭足人」があった。　この時期の人物表現の特徴とすればこれでよいが、全員に顔を肌色で描かせることには問題があるように思った。

私は時々年少のクラスで、顔の中に「ボタン」や「洋服」を描いている頭足人を見かけていたので、このような指導を見ると「はたして全員が円の中を顔と思っているのかな、胴も含めている子もいるのでは」と考えたのである。もしこのようなことを先の保育者が気づいておられたとしたら、すべての顔を肌色で描かせるようなことはされなかったのではと思い、表現の発達や様式について見直すことにした。

1　これまでの絵画表現の一般的発達段階



絵画の発達段階についてはいろいろと研究されているが、3才頃から5才頃までの表現はあまり明らかにされていない。

幼児の絵画表現の発達において、人物がそのスタートであることはどの研究者も認めているが、その時期や様式についてはまちまちである。また描かれた人物についても「人物は頭足人といわれ頭から直接足が出たりする。早い子は胴や手も描けるようになる」が定説となり、円から足や手が出ていればすべて頭足人であるとこれまで考えられてきている。このことは、どの専門書を見ても表現は異なっていても内容はほぼ同じであり、3才頃からの人物表現の特徴として誰もが共通理解してきたことである。ここに幾つかの例をあげてみよう。

○前図式期の絵画は、　ともかく何であるかが分かる。描き方としては、顔は円、目は点、足は1対の線で表現する・・・・・・・・「幼児絵画製作教育法」

○象徴の時期＝最初にかかれる人物画は、頭の部分を表わす円形と、足を表わす二本の線から成り立っており、胴体がない。“頭足人”ともよばれるこうした絵に、やがて腕が現れる。多くは二本の足とともに、頭から直接・・・・・・・「幼児の絵画製作」

○前図式期（3才半～4才半）はカタログ期といわれるように・・・・・やがて、自分で見つけ出した基本図形をもとにお互いの図形同志や図形と線の組み合わせによって次ぎ次ぎと新しい図形が作られていく。人物・家・花・木・太陽などはすべて基本図形と線の組み合わせである。頭足人といって円形の顔に直接2本線の足をつけて人物を表現するのも、この例である・・・・・「表現－絵画製作・造形－」

○「頭足人」＝スクリブルの時期から意味ある形への移行において最初に見られるのは、円・楕円に近い形である。・・・・・この時期の人物の表現において子どもはしばしば次図（頭足人）のように頭に手足のはえたような人物を表現する。「新美術教育基本用語辞典」

○たとえば、閉じた円のスクリブル（なぐり描き）が3才の頭足人のステップ（芽生え）となり、頭足人がやがて手足が出る4・5才の十字型人物表現のステップとなります・・・・・・・・「領域・表現」

○人間風のアグレイトは顔の部分を含んでいる。さらにアグレイトのある部分は胴のように、手足のようにも見える。こういう絵は児童画発達の過程の主流ではない・・・・・「児童画の発達過程」ケロッグ

以上は、私の手元にある文献からの例であるが、そのいずれもが円を顔又は頭と断定している。ケロッグは円の中に胴を認めてはいるが主流ではないとし、数多く描かれることはないとしている。

「頭足人」についての説明には上記のようにいろいろあるが、その根源となるものは不明である。外国の文献によるものではないかと思われる。それにしても、3才半から4才半までの発達過程について具体的に説明されていないのは残念である。

そこで注目したいのはローウエンフエルドの研究である。彼は2才から4才までを「鎖画の時期」とし、4才から7才までを「前図式期」として、前図式期のところでジョニーについてこう述べている。

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

ジョニーは、おとうさんの裸の腕につかまりながらおとうさんについて重要な経験をします。今度はジョニーはおとうさんを描く時、前とちがった風に考えます。「おとうさまは頭と二本の大きい足を持っている。そして二本の大きな手も」(子どもの絵勝見勝訳)

彼の段階表はケルシエンスタイナーとともに権威あるものであるが、上記の事例が4才から7才までのいつ頃であるか不明であるし、この文献をもとに円がすべて頭や顔であるかの説には問題がある。私のこれまでの調査では日本の子どもの発達は少し早いようで、幼児の絵画表現の発達表は見直す必要があると思う。

2 調 査

(1)対称児＝2つの保育園の年少児

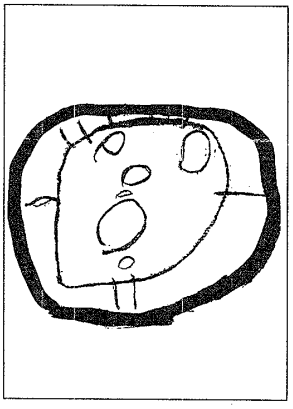
(2)目　的＝頭足人といわれる表現において、円の部分が顔・頭かを確認する。

(3)方　法＝好きな人物を黒のパスで線描きした後に、洋服を絵の具で描く。

3 調査の結果

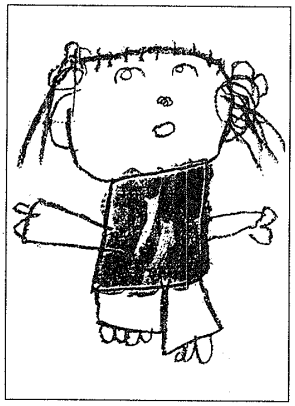
（作品1）

（作品2）



（作品3）

（作品4）



園児は両園で40名程いたが、ほとんどの子が自分の描きたい人物を描いてくれた。いろいろな表現が見られたが、まとめると上のような4パターンとなる。

（作品1）＝顔と思われた円の中下部に洋服を描いていることから同一円に頭と胴がある。

（作品2）＝顔と思われた円の全体を洋服で囲んでいることから同一円内に頭と胴がある。

（作品3）＝顔と思われる円の外下部に洋服を描いていることから頭と胴が分離している。

（作品4）＝完全に頭の部分と胴の部分が、分離した表現をしている。

4 考 案

作品4のタイプの子は、円が完全に頭部になっているが、作品1は円の中に胴が含まれ頭胴足人の表現と見てよいだろう。作品2は円全体を洋服で囲み、顔や頭そのものが全身とも考えられる。作品3は円の外下部に洋服を描いていることから、頭と胴が分離しているので、顔・頭だけの表現と思われる。

これらの調査から3才からの人物表現は「すべて円は顔である。円は頭である」といった説は否定できるだろう。言えることは、3才からの人物表現には「頭足人」としての表現と「頭胴足人」としての表現があるということだ。いずれの場合も「顔や頭そのものが身体全体である」とした見方をする方がよい。こう考えると、「これお母さんよ」と言って顔だけ描いている3才児の子どもの心が理解できるような気がする。

5 今後の課題

たしかに幼児は3才前後から円の終結が始まり、やがて円から直接線を出した人物表現へと移行し、更に頭部と胴部が分離した表現となるが、ここに至るまでの円表現は何を意味しているかについては今後研究しなければならない。今考えられることは、3才過ぎの円は顔の表現をしているが身体全体を意味しているのではないか、また認知力や想像力が増すにつれて同一円の中に頭と胴が含まれるようになり、やがてそれが分離するのではないかという仮説である。

おわりに

この調査は、ごく一部の調査であるが一般的な傾向として受けとめてよいだろう。もしこれから先に3才から始まる人物表現が「顔とか頭」に限定されずに胴も含む「頭胴足人」としての表現も理解されるなら、円の内側のすべてを肌色で描かせる保育は無くなるのではないかと思う。

発達段階を正しく把握することは保育上極めて大切であるから、今回の調査をもとに更に具体的に研究しなければならない。全国の諸先生方のご理解とご協力でこの問題が一日でも早く解決できればと思う。

NII-Electronic Library Service